



21世紀に向けての小児歯科保健

岡山大学歯学部教授

下野 勉

略歴

昭和 20 年	兵庫県神戸市 生れ
昭和 45 年	大阪大学歯学部 卒
昭和 52 年	歯学博士（大阪大学）
昭和 53 年	大阪大学歯学部助教授（小児歯科）
昭和 59 年	岡山大学歯学部教授（小児歯科）

〔講演要旨〕

古くには虫歯は文明病の一つであると言われていた。世界中の国々において、文明の発達とともに虫歯の急増がみられたことは事実である。わが国においても、高度成長にあつた昭和40年代には、食生活や環境の急激な変化とともに、子供達の口の中では、いわゆる虫歯洪水が始まり、一般歯科医院での診療拒否など深刻な社会問題にまで発展した。そして30年後の今日、成人した当時の子供達の口の中では新たに歯槽膿漏が蔓延しつつある。さらに最近の子供達には、糖尿病や高血圧、高コレステロールなど、今までに見られなかつた病気まで現れてきた。最近の研究では虫歯や歯槽膿漏の原因や予防法も確率され、欧米諸国のいわゆる先進国においては急激なこれらの病気の減少が報告されており、もはや文明病であるとは言えなくなっている。これらの病気の予防にはいわゆるプラークコントロールすなわち、プラークを作らないか完全に取り除くことが必要である。しかしこれらの事柄は、言うは易く行うは難しであり、人間の生活行動と密接に関わっている。虫歯や歯槽膿漏を単なる歯の疾患としてとらえるのではなく、『その人が生活している家族や社会全体の問題』であり『暮らしの病』であるという認識が必要である。つきつめていくと、高血圧や高コレステロールからくる心臓病や脳血管障害など、成人病の原因と共通する背景をもっており、子供の時代の健康づくりの基本は虫歯予防であり、そのことが将来の成人病予防の基礎となると言っても過言ではなかろう。

本講演では、虫歯という病気を子供から老人に至るまでのライフサイクルすべての段階における心と体の健康に関わる問題として考えてみたい。